

「平成 21 年度 医療安全に関するワークショップ ～今みつめなおす医療人としての姿勢～」報告

東海北陸厚生局 健康福祉部医事課

山下 優美

12 月 12 日、厚生労働省東海北陸厚生局の主催により「医療安全に関するワークショップ」～今みつめなおす医療人としての姿勢～をテーマとして、石川県地場産業振興センター（金沢市）で開催した。

厚生労働省の医療安全推進週間にちなむ東海北陸厚生局主催の恒例行事で、平成 14 年の開催以来初めての北陸開催である。石川、富山、福井、新潟や東海地方などから医療関係者ら約 300 人の出席があった。

上原鳴夫東北大大学院教授は「医療安全全国共同行動と 8 つの目標」と題して講演し、有害事象から患者さんを護り、医療の安全性を高めるための、医療界における職種や立場を超えた取り組みを紹介された。

金沢大学付属病院の野村英樹准教授は「医療安全の支柱としての医のプロフェッショナルリズム」と題して、各国の例をとりあげ、医師の責務について考えを述べられた。

国立国語研究所の田中牧郎准教授は「病院の言葉を分かりやすくする提案」で、医療従事者の専門用語を患者が理解できる言葉に言い換えることで治療にもつながると報告された。例えば DIC（播種性血管内凝固症候群）や COPD（慢性閉塞性肺疾患）などの用語はもちろん、寛解（一時的に症状が軽くなること）やクリニカルパス（患者用の入院スケジュール表）など一般になじみがない言葉は分かりやすく伝える必要があることなどがあげられた。

愛知県厚生連安城更生病院の安藤哲朗医療安全管理部長は「医療メディエーションによるコンフリクトマネジメント」——医療紛争から日常診療まで——と題して講演された。対話の基本や患者の心理の過程、対話のなかに中立的第三者（メディエーター）が存在することで、より当事者同士の協調的な対話が促進され、信頼の再構築に役立つことなどについて述べられた。

最後にアンケート結果は回答率 85.3%で、大いに参考になった 26.6%、業務の参考になった 72.3%で、ほぼ全員の方から今回のワークショップについて良い評価を受けた。